

哲学的背景

はじめに

保健医療行動の実存的背景、すなわち哲学的背景を考察するにはいくつかの方法がある。哲学といっても、哲学書を読んだり、哲学的用語を吐いたりすることにとどまらない。それは、せいぜい「哲学について」考えているにすぎないからだ。本当の哲学は、わたしたち一人ひとりの生のなかに存在し、わたしたちの生とともにある。だから、本来それは言葉で表現しつくすことはできないし、もちろんこうして文章を読んで理解するというものでもないのである。しかし、哲学的思考＝志向＝試行は必要なものであり、わたしたちを生の方へと導く駆動力をもっている。その片鱗を垣間見ることはできるかもしれない。

臨床哲学

20世紀の終わり頃から、わが国で「臨床哲学」ということが言われだした。「臨床」は、もともとは医療分野において用いられる表現であり、直接患者と対峙して治療にあたるような姿勢をさしている。それに対して「基礎（医学）」は、患者個人ではなく、患者から得られたさまざまな情報を分析し研究することによって臨床へと橋渡しをする役割をもっている。つまり、「臨床」は直接主義であり現場主義であり、かつ臨機応変な答えが要求される場面に付された名称である。哲学は、教壇哲学とか机上哲学と皮肉られ、哲学的な専門用語を駆使し、それを理解（というか使用）することができるわずかな集団が、閉鎖的に、ないし没社会的におこなっている伝統的な思考体系と、ずっと思われてきたのである。しかし、前述したように、哲学は個人の生と深くつながっており、さらにはその個人を成立させているさまざまな環境（家族、社会、国家、人類など）とも密接に結びつく性質をもっている（はずである）。そこで「臨床哲学」という考え方が、哲学に対しても、哲学以外のあらゆる知的営為に対しても提唱されたのである。これは、一人ひとりの生、つまり生活や生産や生命におけるさまざまな問題、疑問、不安、ひらめき、発見などを語りあい、それらを共有することで、「正解」を得ようとするのではなく、そもそも、なぜそのような問題を抱くようになったのか、あるいはそうした問題を解決するためにどのような方法をとってきたのか、など幅広く「問題そのもの」を考えてゆく作業に与えられたものである。日本で最初に大阪大学に臨床哲学の講座を設置した鷺田清一は、臨床哲学を実践するためには「外部をもちこまないこと」と表現している¹⁾。つまり、聞き手の側が自分の知っている常識なり概念なり、あるいは書物やネットから得た情報なりを、問題を抱えた話し手に対して説得や納得の手段として提供しないということであろう。端的に言えば、自分自身で考える、ということに尽きるが、だが、「話す」ことによって自身の内部が言語化＝客観化され、自身の来し方行く末を俯瞰して見ることができるようになるかもしれない、それはすでに「哲学的態度」と呼ぶにふさわしい場に立っているのである。

● ホモ・パティエンスとしての人間

保健医療行動科学の対象は全人類である。とりわけ「病む人」「苦しむ人」が特権化されることになるかもしれない。もちろん、病んだことのない人間、苦しんだ経験のない人間など存在しないだろう。その意味では、保健医療行動科学は、やはりより多くの人びとを射程におさめた知的かつ実践的の学問であると言えることができるだろう。そうした保健医療行動科学の哲学的背景を考えると、最初に浮かぶのは、人間を「ホモ・パティエンス（苦悩する人）」と喝破した精神科医フランクル（Frankl, V.E.）である。よく知られているように、フランクルはユダヤ人であるという理由で第二次世界大戦中に三ヶ所の強制収容所に送還された経験をもっている。「経験」と簡単に言ってしまったが、その経験のなかには、両親と妻を亡くすという悲惨な出来事が含まれており、その一方で自身は戦後に解放され、1992年に92歳で亡くなるまで旺盛な執筆、講演、そして治療活動を続けてきたという事実もまた含まれているのだ。フランクルは、収容所での体験を一冊の本にまとめている。それは『夜と霧』（原題は『強制収容所における一心理学者の体験』）という書名で1946年に刊行されている²⁾。フランクルのこの著作がいま現在でも多くの読者を牽引しているのは、単に収容所での残酷で悲惨な体験をレポートした記録物としてではなく、そのような地獄にあってもなお人間性を失わずに気高い精神性によって生き続けた人びとの存在を明らかにしたからに他ならない。フランクルはしばしば「あなたがどれほど人生に絶望しても、人生のほうがあなたに絶望することはない」と言う。また、フランクル自身も『苦悩する人間』の冒頭に引用しているニーチェの箴言に「苦悩そのものが問題なのではない。『なんのために苦しむのか』という問い叫びにたいして解答がないのが問題なのだ」というものがある³⁾。『夜と霧』は死にもっとも近い極限の状況においても、人間がいかに人間であり続けることができるかということについて克明に書かれた書物なのである。

だが、フランクルのように、圧倒的な絶望体験をした後に生還することができた人間だけが価値ある勝者というわけではもちろんない。わたしたちは、日々の生活のなかでさまざまな「苦悩」に苛まれている。その内容も程度も千差万別だ。そして、そんな苦悩からなんとかして逃れようと毎日をもがいて生きているかもしれない。それゆえに、わたしたちは皆「苦悩する人」なのである。フランクルは収容所のなかで、リーダー格の囚人から、いかに「自己崩壊による死」から身を防ぐことができるかについて話をしてほしいと頼まれたことがある。その時にフランクルは次のように述べる。「私は私の仲間達に（...）人間の生命は常に如何なる事情の下でも意味をもつこと、そしてこの存在の無限の意味はまた苦悩と死をも含むものであることについて語った。そして私は真暗なバラックの中で（引用者註；収容所内は停電になっていた）注意深く聞いている哀れな人々に、われわれの状態の重大さを直視し、かつそれにも拘わらず諦めないことを望み、われわれの戦いの見込みのないことは戦いの意味や尊厳を少しも傷つけるものではないことを意識するように懇願した」⁴⁾。そのあとにフランクルは続けて言う。「意味なくしては（...）苦しもうと欲しなかった。同様に意味なくしてわれわれは苦しもうとは欲しないのである。この究極の意味をこの収容所バラックの生活に与え、また今の見込みない状況に与えることが、私

の語ろうと努めたことであった」。

● 苦悩の意味論

フランクフルは、現代の多くの医者たちが不躰に「お大事に」とか「すぐによくなります」などと言ったり、自分より元気で健康な友人が「大丈夫だから」とか「がんばって」と励ましたりするような、そのような殺伐とした人間関係を土台にした言いぶりは決してしない。話し手であるフランクフルと、聞き手である囚人たちが完全に同等の立場で「話す-聞く」という関係を構築しているのである。そして、彼らは収容所の中で明日をも知れぬ命の身という共通した苦悩を抱えている一方で、個々にいろいろな苦悩を抱えこんでもいる。ニーチェが言うように、理由のある苦悩、誰かのための苦悩、何かのための苦悩であれば、人は耐えることができるのである。凡庸な人生訓であれば、そうした苦悩を乗り越えたところに真の生き方が見つかるなどと言うかもしれない。あるいは、多くのカウンセリングであれば、そうした苦悩を心理的に取り除くことに拘泥するかもしれない。だが、フランクフルはそのどちらにもノーをつきつける。「生命そのものが一つの意味をもっているなら、苦悩もまた一つの意味をもっているに違いない」⁵⁾。

苦悩は無意味であって人間の無力さを表象している、という通俗的な苦悩論ではなく、人間の本质（人間だけが持っている能力）を苦悩と捉え、その苦悩に意味をもたせること、何かのための苦悩であるという認識に立つことの重要性を強調している。たとえば『苦悩する人間』では「わたしがなにかのために、だれかのために苦しむときにのみ、わたしは苦悩を志向することができるのであり、意味豊かに苦悩することができるのである。（…）意味豊かな苦悩とは、『……のための』苦悩である」と述べられている⁶⁾。また、別の場所でフランクフルは「苦悩の超越」という表現を用いている。彼の言う「苦悩の超越」とは、苦悩を解消して、それを突破して…という意味あいではなく、むしろ苦悩そのものと徹底的に対面する、苦悩の意味を探求するという態度を継続することこそが重要であり、そこに「ホモ・パティエンス（苦悩する人）」としての意義と使命があると述べているのだ。ちなみに「パティエンス」の語源である「パトス（pathos）」には「痛み、苦しみ、病い」などの意味がある一方で、「熱情、感動、情熱」といった意味がある。つまり、そこには「外部から与えられた何らかの力」に対して一時的にであれ永続的にであれ反応することといったニュアンスが含まれているのである。「パトス」の反対語として「ロゴス（logos）」が知られているが、要するに「ホモ・パティエンス（苦悩する人）」には、理性的・理知的であり続けようとする人間のもうひとつの側面を活写しているとも言えるし、同時に「パトス」をただ感情の揺れ動きと捉えずに、もっと理性的に「パトス（苦悩）の根源」へと潜行してゆこうとする意志の強さが期待されてもいるのではないだろうか。苦悩をネガティブに捉えるのではなく、自分を成長させる意味ある存在と逆転の発想をすることが、フランクフルの提唱する「苦悩論」なのである。

フランクフルはすでに戦前から精神医学の現場で「ロゴセラピー」という手法を展開している。これは「実存分析」と訳される心理療法のひとつであるが、生の意味を見つけることが生きるうえでの強い駆動力を与えてくれるというフランクフルの主張がここにはこめら

れている。なお、「実存」という言葉が使われているが、これはたとえばサルトル (Sartre, J.=P.) が主張した「実存主義」のそれとは内容が異なっている。サルトルにとって「実存」とは「各人をしてみずからあるところのものを把握せしめ、みずからの実存について全責任を彼に負わしめる」ような人間存在のありかたをさしており、「人間はみずからを選択するというとき、(...) 各人がそれぞれ自分自身を選択するということであるが、しかしまた、各人はみずからを選ぶことによって、全人類を選択するということをも意味している」⁷⁾。フランクフルンにとっての「実存」のありかたは、あくまでも個人が蒙る無数の苦悩の意味をどう捉え直すかというところに力点が置かれているのであって、それは「全人類を選択する」といった、大仰な発想を持ってはいないのである。サルトルの実存主義は、戦後の一時期だが若者の心を確実に捉えていた。明日はどんな日がやってくるのか不安でしかたのない、そんな日々を送っている若者にとって、ある意味「自分の好きなように自分の生を選択すればいい」とも聞えるサルトルの思想はずいぶん心強かっただろう。だが、自分の生を想像する自由はあるかもしれないが、実際には選択の自由などほとんどない。むしろ苦悩を忘れて自由に羽ばたこうとすればするほど、人は抑圧されもがき苦しむことになる。フランクフルンはともかく肯定的に生きる、と言うであろう。もちろん、悲劇や絶望や失意といった苦悩を抱えたまま生きることは楽な道のりではない。しかし、フランクフルンは言う、「時の痛みとともに、永遠の至福が訪れる」と⁸⁾。単に、時間がすべてを解決してくれる、といった手合の「慰め」ではないことは明らかだろう。わたしたちは辛く苦しい時間を持つのではなく、わたしたちを生かす時間そのものが痛みを持つのである。

このようにしてフランクフルンの思想は、「苦悩」をめぐる従来の思考方法をダイナミックに、かつ積極的に転換している。その思想がいかに保健医療行動科学へと架橋することができるかについては、各自が討究すべきことなのである。

引用文献

- 1) たとえば、鷲田清一：聴くことの力。阪急コミュニケーションズ，1999
- 2) Frankl, V.E. : trotzdem Ja zum Leben sagen : Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager, Kösel-Verlag, München, 1977(1946) 霜山徳爾訳：夜と霧。みすず書房，1977
- 3) Frankl, V.E. : Homo Patiens - Versuch einer Pathodizee, Deuticke, 1950 真行寺功訳：苦悩の存在論。新泉社，1998
- 4) フランクフルン (霜山徳爾訳)：夜と霧，191-192 頁，みすず書房，1977
- 5) 同書，168 頁
- 6) フランクフルン (真行寺功訳)：苦悩の存在論，126 頁，新泉社，1998
- 7) Sartre, J.=P. : L'Existentialisme est un humanism. Editions Nagel, 1946 伊吹武彦ほか訳：実存主義とは何か。人文書院，1996
- 8) 姜尚中：永遠の至福を求めて (諸富祥彦：100 分 de 名著ブックス フランクフルン 夜と霧。NHK 出版，2013)

(小林昌廣)